

九宮八風圖の成立と河圖・洛書傳承

—漢代學術世界の中の醫學—

白杉悦雄

一 『七略』的學術世界と醫學

醫學は天文學及び數學とともに中國古代の自然學を代表するものである。醫學の領域は、劉歆の『七略』¹⁾、その要旨を取って編纂された班固の『漢書』藝文志において、「方技とは、皆生生の具、王官の保守なり」とされ、兩漢の際には既に術數學とともに六經を中心とする學術世界の末流に位置づけられていた。

學術總體の中心をなす六經についていえば、藝文志の六藝略の次序では、樂・詩・禮・書・春秋の五學に五常を配し、易を「これが原たり」と位置づける。さらに「世々變改有る五學にたいし、易は「天地と終始を爲す」とされ、六經の統一的把握がなされている。劉歆によって構想された學術世界は、易學を頂點とする六經と、六經を頂點とする六略という構造をもつものであり、醫學はそのような學術の階層構造の中の一つの領域として認定されていた。

しかしながら、學術總體の内部に立入ってみれば、各領域は決してステティックな閉じた領域としてあったのではない。むしろ、各領域間の交流が推進され、六經（經學）が自然學をも含めた新たな知識を經解釋に導入し、經學の枠組みを擴大しつつ體系化しようとするダイ

ナミックな流れのなかで、劉歆の學術世界が構想されたと考えるべきであろう。

象數易においては、易と天文・曆數學とが結合し、卦氣説が行なわれた。また、前漢末、易が六經の筆頭に置かれると、劉歆の三統曆のごとく逆に天文・曆數學が、易の數理を借りて自説を權威づける現象がみられる。自然學は經を補完するものとして經學的に把握されることによって新たな展開をみせ、他方、經學自體も諸學を包含した総合的な經學へと變貌していったのである。

醫學もまた他の學術との交流を通じて独自の展開をみせる。現存する『黃帝內經素問』と『黃帝內經靈樞』(以下、『素問』『靈樞』と略稱)には、時令や連令災異の形式を借りて形成されたと考えられる論文が多數收められている。また、醫學が象數易と結びついた例として、『素問』脈解篇を挙げることができる。脈解篇の中には易や卦爻を直接にいうものは一言半句も現われないが、ここでは、經脈の病症が十二消息卦の陰陽消息によって説明されている。

前漢末以降の醫學を取り巻く學術世界の情況を考えると、易と醫學との結合は當然のことと思われるし、事實、後世の醫家もそう捉らえていた。

道教及び醫學の兩分野に大きな足跡を残し、真人・藥王と尊稱された唐の孫思邈は、その著『千金方』一書の冒頭に、「凡そ大醫爲らんと欲する」者が必ず讀んじなければならぬ醫學書として「素問・甲乙・黃帝鍼經」等を列記した後、「又須らく陰陽祿命・諸家相法及び灼龜五兆・周易六壬を妙解すべし。並びに須らく精熟すべし。此の如ければ乃ち大醫と爲ることを得」(卷一「大醫習業第一」)と記している。明の張介賓も『類經附翼』の中で、「易を知らざれば、以て太醫と言ふに足らず」(卷一「醫易義」)と孫思邈の言を祖述する。

しかし、孫思邈が列記した醫書の筆頭に位置し、唐代には既に醫學の分野の經書として取り扱われるようになっていた『素問』と『靈樞』及び前二書を編集した唐初の楊上善の『黃帝內經太素』(以下、『太素』と略稱)の現行テキストを検索しても、易や八卦に直接言及する語句は見當たらぬ。唯一の出現例は、『靈樞』及び『太素』の九宮八風篇の篇首に掲げられた圖に記載されたものである。後世の眼から見れば、九宮八風篇の圖に八卦が書き込まれたことも、當然のことであろう。だが、そうであれば、現行のテキストの中に易に直接言及するものが見當らないことが奇妙に思われる。後世の醫家が必然的本質的なものと考えていた易と醫學との結合が、いつ・どのように始ったのかは、自明のことではないのである。

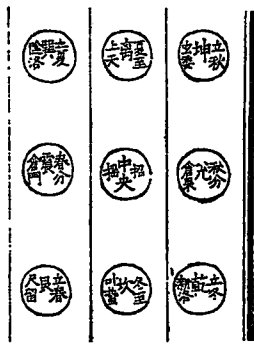
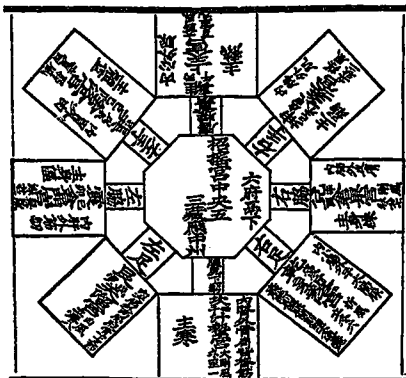
九宮八風圖は、現存する醫學資料の中で、恐らく易の八卦を明記する最初の資料である。この事實を重視すれば、圖は易と醫學との原初的な結合の様相を示す貴重な資料ということにならう。現時点でこの資料にそこまでの評價を與えることは躊躇されるとしても、少なくとも、圖の作者の置かれていた學術世界のありやうを傍證する資料として、看過すべからざるものであることは確かである。本稿は、九宮八

風圖をてがかりに、易と醫學との一つの結合が行なわれたとき、それを外から梓つづけていた學術世界について考えようとするものである。

二 九宮八風篇の内容

九宮八風篇は、圖とそれに續く本文とからなる。若干の文字の異同を除けば、本文の全文が『靈樞』及び『太素』に收められている。兩者の最も大きな相違は、それぞれの篇首に掲載されている圖の繁簡である(圖一・二参照)。本文の内容を見る限りでは、『太素』の圖のほうが本文によく對應しており、『靈樞』の圖はそれに較べて甚だ簡略である。

本文の冒頭では、まず、九宮名がいわれる。『靈樞』では宮名の下「圖一」『黃帝內經太素』九宮八風篇 「圖二」『黃帝內經靈樞』九宮八風篇



に方位が附記されていて、九宮が中央と八方の方位の宮名であることが知られる。空間的領域としての八方は、時間的には二至二分四立の八節にあてられる。さらに、方位と八節は、縦・横・斜めの數の合計がすべて十五になるように配置された方陣の中に布置されている。續いて本文の前半は、「太一」が多至の日から四十六日間、北方にある汁蟄宮（『靈樞』作叶鬱）にとどまり、立春には天溜宮に移り、以下同様に八節の推移にしたがって中央を除く八宮を時計回りに循環することを述べる。少し後の本文に、

太一の移る日、天必ず之に應ずるに風雨を以てす。其の日を以て風雨あれば則ち吉、歳美にして、民安んじ病少し。之に先んずれば則ち雨多く、之に後るれば則ち旱多し。

とあり、太一九宮が風雨の占いであることが示される。太一とは、『易緯乾鑿度』の鄭玄注に、「太一は、北辰の神名なり」と。また、『太素』八正風候篇の楊上善の注に引く『九宮經』に、「太一なる者

〔表一〕

身體部位	卦	干支	九宮	八節	九數	八風	内	外	氣
左足	艮	戊寅	天溜宮	立春	八	凶風	内大腸	外兩脇腋骨下支節	(欠)
左脇	震	己卯	倉門宮	春分	三	嬰兒風	内肝	外筋紐	主身濕
左手	巽	戊辰己巳	陰洛宮	立夏	四	弱風	内胃	外肉	主體重
膺喉首頭	離	丙午	上天宮	夏至	九	大弱風	内心	外脈	主熱
右手	坤	戊申己未	玄委宮	立秋	二	謀風	内脾	外肌	主弱
右脇	兌	辛酉	倉果宮	秋分	七	剛風	内肺	外皮膚	主身燥
右足	乾	戊戌己亥	新洛宮	立冬	六	折風	内小腸	外手太陽脈	主脈絕則盜脈閉則結不通暴死
腰尻下窻	坎	壬子	汁蟄宮	冬至	一	大剛風	内腎	外骨肩背脊筋	主寒
六府鬲下三藏應中州			招搖宮	中央	五				

は、玄皇の使にして、常に北極の傍の汁蟄に居り、…」という。九宮八風篇の後半では、八節ごとに吹く風と病との關係が述べられる。風は、實風と虚風の二つに分けられる。實風は、太一がその季節に居るべき宮の方角から吹いてくる風であり、萬物を生み育てる、その季節に相應しい風である。一方、虚風は、その季節に太一が居る宮と反對の方角から吹いてくる風であり、人の健康を損い、萬物を殺害する風である。九宮八風篇の前半で述べられた風雨占いとしての太一九宮占は、風の虚實を區別する實風と虚風概念の概念によって、醫學と結びつく。續いて本文では、八方から吹いてくる虚風の名稱をあげ、それぞれについて「内・外・氣」の三點から人體との關連を述べる。

(表一の八風・内・外・氣参照。)

九宮八風篇の本文は、風雨の占いである太一九宮占が、虚實の概念を介して醫學の風の病因論へと改編されたものである。

つぎに、本文と圖の關係について検討する。『太素』の圖と『靈樞』の圖とは、繁簡にかなりの差があり、兩者の關係が問題となるが、それについての議論は圖についての検討を終えた後にすることとして、ここではより本文に對應し、多くの情報を含む『太素』の圖を取り上げることにする。

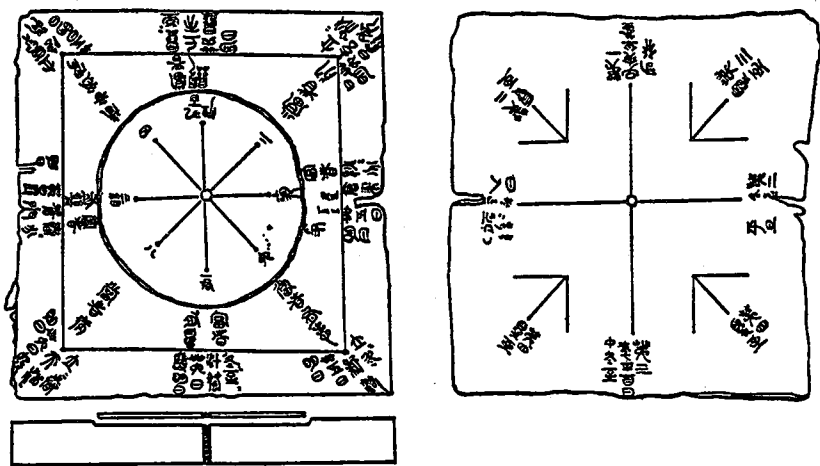
『太素』の圖(圖一)の記載文字を、中央を最後にして、内・外の順序で時計回りに書き寫すと表一のごとくなる。項目名は、行論の便宜上加えたものである。

表一の身體部位・八卦・干支・九宮・八節・九數・八風・内・外・氣の十項目のうち、八節・九數・九宮は本文の前半部に、八風・内・外・氣は本文後半部にみえている。しかし、残りの身體部位・卦・干支は本文中に現われない。しかし、記載事項のうち、身體部位・八節・干支をいう文章が『靈樞』九針論篇に含まれていた(文章で詳述する)。「太素」の圖の記載のなかで、對應する文を見出せないのは、八卦だけである。

既に述べたように、易の八卦を明記するのは九宮八風篇の圖だけである。現行のテキストの中に易をいうものがない理由の一つとして、つぎのことが考えられる。現存する『素問』『靈樞』に收められている論文は、多くの場合、内容的にまとまりのある文章がいくつか集って一篇を構成しているが、それらの文章のほとんどは、象數易や緯書説が流行し學術世界で支配的になる前に成立していたとすることである。この推定は、勿論新たな資料の出現を待って立證すべきものであるが、蓋然性の高いものである。長沙馬王堆三號前漢墓から出土した古醫書群(墓葬年代は前一六八年)や湖北江陵張家山漢墓から出土した『脈書』(墓葬年代は前一八八〜一八〇年頃)に記載されている文字

九宮八風圖の成立と河圖・洛書傳承

【圖三】安徽省阜陽縣汝陰侯墓「太一九宮占盤」



が、文章の構成材料として、ときにはほぼそのままの形で、現行のテキストに保存されていることを、その例證として擧げることができ
る。

一九七七年、安徽省阜陽縣の前漢汝陰侯墓（墓葬年代は前一七三年と推定）から、天文学及び占星術用の三種類の器械が発見された。そのうちの第二號盤の所謂太一九宮占盤（圖三）は、九宮八風篇の前半の文章と密接な關係を有していることが明らかにされている。詳しくは山田氏の研究に譲るが、九宮八風篇の前半の文章は、そのまま太一九宮占盤の解説、或いは、占盤に關する當時の文章の借用と見做しうるものである。この事實は、九宮八風篇もまた、いくつかの獨立した材料が集められ、加筆・編集の手が加わって成立したものであることを示唆している。『太素』の圖にいたっては、その上に九針論篇の文章或いはそれが基づいたものと八卦とを加え、それらの集成の上に作成されたものである。そこには複數の體系の混在さえも豫想される。そこで、圖を構成する要素のそれぞれの先蹤を求め、それらの集成を可能にした統合理念を明らかにすることがつぎの課題となる。

三 九宮八風圖の先蹤

『太素』の圖に記載されている九數・九宮・八節の三項目及び圖の基本的な構成は、太一九宮占盤の出土によって、より古いかつ具象的な先蹤をもつものであったことが、既に明らかにされている。したがって、本章ではその他の要素について検討するに止める。

(11)

『太素』の圖の記載項目のうち、身體部位・八節・干支に對應する文章が、『靈樞』九針論篇に含まれていた。身形と九野の對應を説くつぎの文がそれである。

左足應立春、其日戊寅己丑。

左脇應春分、其日乙卯。

左手應立夏、其日戊辰己巳。

膺喉首頭應夏至、其日丙午。

右手應立秋、其日戊申己未。

右脇應秋分、其日辛酉。

右足應立冬、其日戊戌己亥。

腰尻下竅應冬至、其日壬子。

六府鬲下三藏應中州。

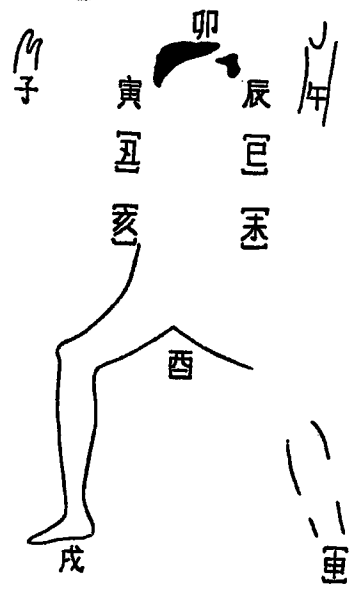
この文は、現存する『太素』にはみえないが、『太素』の圖の内容と一致することは、一見して明らかである（二章の表一参照）。

立春と春分の干支に注目すると、『太素』の圖では「戊寅」「己卯」に作ることを九針論篇では「戊寅己丑」「乙卯」に作っている。四立では立夏・立秋・立冬が皆「戊○己△」と記述するところからみて、九針論篇の方が例に適っている。また、「己卯」の己はこの誤りとみられる。乙であれば、二至二分の乙（木）・丙（火）・辛（金）・壬（水）と四立の戊己（土）とで五行が揃うからである。さらに、「内」の肝・心・肺・腎の四藏と、胃・脾及び大腸・小腸の消化器系の藏府配當ともよく整合する。

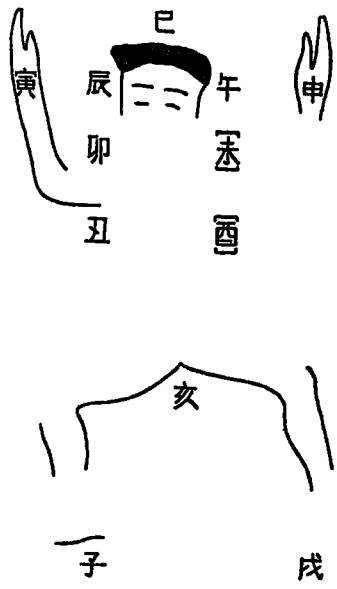
九針論篇では先に引用した文のすぐ後に、

其の大禁、大禁は太一所在の日及び諸々の戊己なり。凡そ此の九者、善く八正の在る所の處・主る所の左右上下を候ふ。身體に難

〔圖四〕馬王堆「胎產書」右上部附圖



九宮八風圖の成立と河圖・洛書傳承



〔圖五〕睡虎地秦簡「日書」甲種「人字」圖



〔圖六〕馬王堆「胎產書」左上部附「萬藏」圖

<p>死 廿四 月 一 日</p> <p>廿 月 一 日</p> <p>廿 月 一 日</p> <p>廿 月 一 日</p>	<p>廿 月 一 日</p> <p>廿 月 一 日</p> <p>廿 月 一 日</p> <p>廿 月 一 日</p>	<p>死 廿四 月 一 日</p> <p>廿 月 一 日</p> <p>廿 月 一 日</p> <p>廿 月 一 日</p>	<p>死 廿四 月 一 日</p> <p>廿 月 一 日</p> <p>廿 月 一 日</p> <p>廿 月 一 日</p>
<p>南方萬藏</p>			
<p>死 廿四 月 一 日</p> <p>廿 月 一 日</p> <p>廿 月 一 日</p> <p>廿 月 一 日</p>	<p>死 廿四 月 一 日</p> <p>廿 月 一 日</p> <p>廿 月 一 日</p> <p>廿 月 一 日</p>	<p>死 廿四 月 一 日</p> <p>廿 月 一 日</p> <p>廿 月 一 日</p> <p>廿 月 一 日</p>	<p>死 廿四 月 一 日</p> <p>廿 月 一 日</p> <p>廿 月 一 日</p> <p>廿 月 一 日</p>

腫有る者、之を治せんと欲せば、其の直る所の日を以て之を潰治すること無かれ。是れ天の忌日を謂ふ也。という文が續く。九野に配された身體部位と八節・干支の意味するものは、八節それぞれに定められた治療の禁忌の日と禁忌の部位を表わすものであったことが知られる。

この禁忌の體系は、九針論篇では既に太一九宮と關係づけられている。しかし、中央にあたる部分には禁忌の日を示す文がなく、「六府・兩下三藏」という記述も、他の身體部位

の記述の例とは異なっている。

いま『太素』の圖に記載された干支に、九針論篇によつて左足に「己丑」を補えば、十二支はその全てがそろい、時計回りに配列されていることがわかる。この十二支によつてつくられる圓環の中に、頭を南(午)に向け、兩手を斜め上方に擧げ、兩足を斜め下方にのぼしている人體を描けば、『太素』の圖の身體部位と十二支の組み合わせが得られる。また、「六府・兩下三藏」を除いても身體の記述としては完結している。

長沙馬王堆三號前漢墓から出土した帛書の中に、整理班によつて『胎產書』と命名された帛書一卷が含まれていた。この帛書の右上部と左上部にはそれぞれ圖が描かれていた。¹⁰⁾

そのうちの右上部の圖(圖四)についての説明は、馬王堆帛書にはみえない。だが、これと同類と見做しうるものが、湖北省雲夢縣睡虎地第十一號秦墓(墓葬年代は前二一七年)から發見された竹簡の中に含まれていた。「日書」甲種の「人字」という標題をもつ圖と文(圖五参照)がそれで、十二支によつて表わされた出産日によつて、生まれた子供の命運を占うものである。

左上部の「禹藏」圖(圖六)は、胎兒の出産時の胞衣を一定の方向に埋藏することによつて、生まれた子供の健康と長壽を願ひ埋藏する方角の禁忌を示すものである。「禹藏」圖についての説明は、馬王堆帛書『雜療方』にみえる。¹¹⁾

「日書」人字圖及び馬王堆帛書の二つの圖と照し合せるとき、『太素』の圖の身體部位と十二支の組み合わせは、先行する占いと禁忌の體系に由來するものであり、それらを改變したものであったと推測で

きる。この十二支を主たる要素とする體系が圖に加えられたのは、それが太一九宮と關係づけられていたからである。また、中央の「六府・兩下三藏」は、この占いと禁忌の體系が醫學に導入されたときに書き加えられたものと思われる。

「日書」と『素問』『靈樞』醫學との關連を例證するものとして、「日書」甲種「病」・乙種「有疾」と『素問』藏氣法時論篇とがある。兩者の間にも、「日書」人字圖と『太素』の圖におけるような影響關係を看取することができる。「日書」のごとき占卜書と醫學との關係は、一に止らなかつたことを附言しておく。

(二)

八風の名稱の起源としては、『呂氏春秋』有始覽と『史記』律書の風名がよく知られている。『呂氏春秋』と同類の風名をいうものには、文字に若干の異同はあるが『淮南子』陰形訓がある。『史記』と同じものには、『淮南子』天文訓・『說文解字』・『廣雅』釋天及び緯書がある。これにたいして九宮八風篇の風名は第三の類型をなす。『五行大義』卷四「論八卦八風」に引く「太公兵書」が同一の風名をあげていることから、兵家の占風と密接な關係にあると推測されている。

前漢の八風をいう代表的な資料には、易の八卦との結びつきは現われてこない。『呂氏春秋』及び陰形訓では、方位と八風名とが結合されているが、八卦との結びつきはなく、後漢の高誘の注にいたつて八卦と結合される。『史記』律書では、八風に方位及び十二月・十二支十干が配されるに止る。

八卦が八風・八節・八方と結びついて語られるのは緯書資料においてである。『春秋考異郵』(卷四下、三三・三三三頁)には、「艮を條風と

爲し、震を明庶風と爲し……と、八卦と八風の結合がみえるし、『易緯通卦驗』(卷一下、七八八頁)には、「春分に震風至り、……立夏に巽風至り、……と、八風を八卦を以て呼稱する例もみえる。また、『易緯乾鑿度』卷上(卷一上、二二頁)には、八卦と八方の結合が、『樂叶圖徵』(卷三、一〇六・七頁)には、八卦と八節の結合がみえてい

る。
八風・八節・八方と八卦の結合は、象數易の流行下においては、自然の趨勢であったであろうが、實際にその結合が盛んに行なわれたのは、緯書の形成過程においてのことと思われる。前引した『太公兵法』では、「坎を大剛風と名づけ、乾を折風と名づけ……」と、八風が八卦と結合している。「太公兵法」は『漢書』藝文志には著録されず、『隋書』經籍志・子部・兵家類にみえる『太公兵法』二卷、梁三卷「太公兵法六卷、梁有太公雜兵書六卷」との關連が考えられる。やはり、後漢以降に成立したものであろう。

醫學の中に八風が導入されたときの姿は、風占いとしての八風占であり、太一九宮占と組み合わされたものであった。一方、『呂氏春秋』有始覽の「天に九野有り、地に九州有り、土に九山有り、山に九塞有り、澤に九藪有り、風に八等有り、水に六川有り」という記載からは、戰國時代末期には八風の觀念が成立しており、八風と九野との結合も九分野説のもとで始っていたことが窺われる。太一九宮占の體系も前漢の初期には完成していたから、八風占と太一九宮占との結合も、前漢のそう遅くはない時期であらう。そして、少なくとも當初において、易の八卦との結びつきはなかったと考えてよいであらう。

(三)

九宮八風圖の成立と河圖・洛書傳承

九宮八風篇の後半の中心をなす文章は、八方から吹いてくる虚風が人體を傷う場合について、内・外・氣の三點から述べている。

「内」は、各々の虚風が人體を侵襲したときに寄居する藏府をいう。『素問』『靈樞』醫學では、藏府をいう場合には五藏六府を擧げるのが普通であり、五藏は五行説と強い親和性を有している。しかし、九宮八風篇では、六府から三府を取捨し、それと脾とをあわせた四つが戊己へ配されており、全體では五藏三府という變則的な組み合わせになっている。

「外」については、『靈樞』本藏篇のつぎの記述が参考になるであらう。

肺合大腸、大腸者皮其應。心合小腸、小腸者脈其應。肝合膽、膽者筋其應。脾合胃、胃者肉其應。腎合三焦・膀胱、三焦・膀胱者腠理・毫毛其應。

また、『素問』五藏生成論篇に、

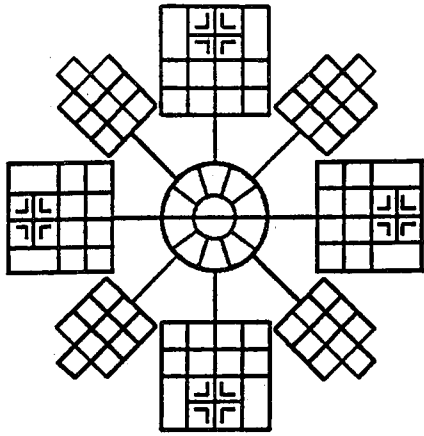
心之合、脈也。：肺之合、皮也。：肝之合、筋也。：脾之合、肉也。：腎之合、骨也。

つまり、「外」とは、五藏、或いは表裏關係にある五藏・六府の外候としての皮・脈・筋・肉・骨(腠理毫毛)をいうものである。本文及び圖では、胃に肉が配され、代りに脾には肌配されている。肌肉はしばしば熟して脾胃の外候とされる。残りの大腸と小腸では、他にはみられない「兩脇腋骨下支節」と「手太陽脈」が新たに外候として附加されている。

「氣」は、虚風が邪氣として身體に侵入したときに、どのような症狀を呈するかをいうものである。これについては、本文・圖ともに凶風の條に記載が無く、折風の條の記載は體例を破る特異なものとなっ

ている。
 ところで、八風への藏府配當は十干の五行配當を介して行なわれていると考えられる。とすれば、論理的には、それ以前に八方（または八節）と十干（または十支）との結合が行なわれ、さらに、それらが五行説とも關係づけられていたと推測される。

一九九二年に刊行された『馬王堆漢墓文物』において、馬王堆前漢墓三號墓から出土した帛書『刑德』乙篇が、新たに公開された。帛書『刑德』乙篇は、三つの部分から構成されている。帛書右上部の「刑德九宮圖」とその左側の「刑德運行干支表」及び刑德運行の規則と兵陰陽家に關する文である。『刑德』乙篇全體の解明は今後の課題とし「圖七」馬王堆「刑德」乙篇附「刑德九宮圖」



て残されているが、『太素』の圖の成立に關わると思われるいくつかの興味深い特徴を指摘することができる。

一つは、「刑德九宮圖」の形状である（圖七參照）。圖中に記載されている文字や説明文には、九宮八風篇や『太素』の圖と共通するものはないといつてよい。しかし、その圖形はほとんど『太素』の圖の祖型といつても差し支えないほどの類似を示している。圖のもう一つの際立った特徴は、九宮が五色で色分けされていることである。中央の圓環は黄色、東宮とその側宮の東南宮は藍色、南宮と西南宮は朱色、西宮と西北宮は白抜ききの二重線、北宮と東北宮は黒線で描かれている。また、中央を除く八宮は、圖形上明らかに兩類に描き分けられている。さらに、圖の北方の最外側には水、東方に木、南方に火、西方に金字があり、未公開の『刑德』甲篇では中央の圓環中に土字も視認できるといふ。

『刑德』乙篇の文の前半の主たる内容は、刑德運行規則と九宮圖の解説である。そこに、「德在木、乙卯爲根。在金、辛卯（當爲酉字之誤）爲根。在火、丙午爲根。在水、壬子爲根。在土、戊戌爲根」（十九・二十行）とある。この文と先に述べた圖の形状及び色分けから、つぎのような圖式を読み取ることができる。まず、九宮は五行によって把握されていること。つぎに、「在土、戊戌爲根」のごとく中央土を四維へ移せば、十干を八方へ配當することができ、八方を五行によって把握できること。さらに、太一九宮占盤や禹藏圖及び『刑德』乙篇自身の「刑德運行干支表」の圖式を重ね合わせると、十二支の八方への、ひいては五行への配當も完了すること。つまり、「刑德九宮圖」においては、九宮・十支・五行が有機的に結合されているのである。この圖式が、九宮八風篇の後半の文章と共通のものであることは明白であ

る。さらに、『太素』の圖との外形上の類似も勘案すれば、「刑徳九宮圖」が範型の一つであつたと推定することも可能であらう。九宮八風篇は、その醫學に固有の部分においても占家の體系に多くのものを負つていたのである。

四 九宮八風圖の構造と統合原理

『太素』の圖を構成する要素の先蹤を尋ねた結果、十項目の要素はいくつかのグループに分類でき、それぞれが以下のごとく独自の由来をもつていたことが明らかにされた。

- ① 太一九宮占盤↓九數・九宮・八節
- ② 八風占(兵家)↓八風(名)
- ③ 「刑徳九宮圖」・五行說・五藏六府說↓内・外・氣・干支
- ④ 「日書」附圖・「胎産書」附圖↓身體部位・十二支
- ⑤ 易(說卦傳)↓八卦

起源を異にする五つの體系が、『太素』の圖の中に混在していた。そして、それらは皆占いの體系との關わりを示している。

ところで、九宮八風篇の本文では、④⑤を除く三つの體系だけがいわれており、それらを統一しているのは、明らかに太一九宮の體系である。

「玄皇の使」(楊上善注引く「九宮經」)や「太一は北辰の神名」(『易緯乾鑿度』卷下鄭玄注)という言い方から知られるように、太一は人格的な神とされている。この太一の季節ごとの移動を梓づけているのは、九宮方陣であるが、九宮八風篇にみえる太一九宮の體系では、九數は

意味を持たされてない。太一は、八方の宮殿を北から時計回りに順に移動してゆくことによって、季節の巡りや自然の規則性を示すものに變換されている。言い換えれば、太一九宮の體系は、九數の意味を棄てることによって、八風占と醫學とを統合する原理となり得たのである。そして、本文の内容は、それだけで十分に統合され完結したもとなつてゐる。

圖においても、八卦を除く四つのグループは、やはり太一九宮によつて統合されていると見做し得る。つまり、圖における八卦は、醫學が理論的な必要から要請したものではなく、醫學を梓づけるものとして外から持ち込まれたものなのである。では、易の八卦は、いつ圖に書き込まれ、そのことには一體どのような意圖が込められていたのか。

本文の凶風の條の「氣」部分の缺落、折風の條の「外・氣」部分の體例を破る記載をそのまま襲っていることからみて、『太素』の圖は、本文よりも後に作られたものであることは疑いない。圖の作者は、圖の基本的な構造を「刑徳九宮圖」や太一九宮占等の九宮圖から借りて、九宮八風篇の内容を寫した。九針論篇の文章もしくはそれが基ついたものによつて、身體部位と干支が書き添えられたのも、圖が作成されたときであろう。

易の八卦が、最初から圖に記載されていたものか、後に書き添えられたものか、明らかではない。しかし、少なくとも八卦が圖に書き込まれたときには、八卦と太一九宮の體系とは、統合しうるもの或いは既に統合されたものと觀念されていたはずである。では、そのときとはいつか。

八卦は、緯書の中ではしばしば八風・八節・八方と結びついて語られていた(前章第二節参照)。さらに、『易緯乾鑿度』巻下では、

陽動きて進み、七を變じて九に之くは、其の氣の息するに象る也。陰動きて退き、八を變じて六に之くは、其の氣の消するに象る也。故に太一 其の數を取り、以て九宮を行る。四正四維、皆十五に合す。

と、九宮方陣の縦・横・斜めの合計數の十五は、易の少陽(七)・少陰(八)の合計及び老陽(九)・老陰(六)の合計數に基づくと考えられている。八卦と九宮の結びつきは、鄭玄注において、より明確である。注によれば、太一は北辰の神名であり、北辰の宮殿は中央にある。八方は八卦神の宮殿で、合せて九宮という。太一は八卦の宮をめぐり、四ごとに中央に還る。すなわち、坎宮(一)↓坤宮(二)↓震宮(三)↓巽宮(四)↓中央(五)↓乾宮(六)↓兌宮(七)↓艮宮(八)↓離宮(九)の順である。因みに九宮八風篇では棄て去られている九數の意味は、鄭玄注では、まだ意味を持つている。

以上の情況證據から推して、易の八卦が圖に記入されたのは、前漢末期以降の緯書の流行下であったと考えてよからう。しかし、依然として、九宮八風圖に八卦が書き込まれたことの意味は不明のままである。

本章では、視點を變えて、前漢末以降の思想史において、易の八卦に與えられていた役割を考察し、殘された問いの解を求めらることにする。

五 緯書學的學術世界と醫學

經學の枠組みの擴大と總合・體系化は、『七略』以後もさらに進められて行つた。その新たな推進力として機能したのが、前漢末に出現し後漢に流行した緯書說である。『七略』六藝略に始る六經の統一的把握は、章帝の建初四年に經義の統一を目的として開かれた白虎觀會議を経て、鄭玄による經學の集大成に至り一つの完成をみるが、白虎觀會議の記録である『白虎通』及び鄭玄の注釋作業には、經義を統一するための根據として緯書說が縦横に驅使されている。

緯書といわれるものの内容は、顧頡剛も述べているように多岐にわたる。言い換えれば、緯書はあらゆる學術領域をその内に含みつつ、六經を横斷し結合するという性格を有していたのである。同時に、緯書はあらゆる學問を六經の下に歸屬せしめ、六經を天書たらしめる機能をも有していた。それは、六經を中心としつつも、新たな階層構造をもつ學術世界が、緯書說の中で構想されていたことを示唆している。

緯書における學術世界の階層構造は、河圖・洛書傳承の中に表現されていると考える。『隋書』經籍志の緯書類の後序は、河圖・洛書について、つぎのような傳承を傳えている。すなわち、孔子は、六經を敍して天人の道を明らかにした後、別に緯及び讖を立てて、後世のために遺した。その書は合せて八十一篇あり、前漢に世に現われたが、そのうちの河圖九篇・洛書六篇は、黃帝より周文王に至るまでに受けた本文であつた、と。

『隋書』經籍志の當時においては、緯書は河圖・洛書に淵源し、し

かも河圖・洛書は聖人の作爲にかかるものではなく、聖人が天から受けたものだという傳承が存在していた。

この傳承は、鄭玄が成し遂げようとした經學の總合體系化の基本理念にも關わるものである。鄭玄の學問にたいして綱領的意義を有するとされる『六藝論』は、全面的に緯書説に基づいて形成されているといわれる。その中に、鄭玄が六藝の由來を説く文がある。

六藝者、圖所生也。(公羊傳序疏引)

河圖・洛書、皆天神之言語、所以教告王者也。(詩・文王序疏引)

ここにみられるのは、經學世界が河圖・洛書に淵源すること、河圖・洛書は天神の言語であり、そこから流出した經學世界は統一的に把握しようという信念である。そして、鄭玄の信念を表明する上記二條もまた、緯書説から導かれたものといわれる。

鄭玄が六藝の總合體系化を通して構想したものは、理想的な統一國家像であったが、その理想的統一國家像は、かれの學術世界像と相即するものである。前引した『隋書』經籍志の述べるところは、まさに鄭玄の學術世界像を祖述するものであったと考えてよからう。

河圖・洛書が本來どのようなものであったのかは、明らかではない。しかし、それとは別に河圖・洛書傳承は、前漢末には一應の形を整えていた。『漢書』五行志上に、

劉歆以爲へらく、虞羲氏 天を繼ぎて王たり、河圖を受け、則りて之を畫く、八卦是れ也。禹 洪水を治め、洛書を賜はり、法りて之を陳ぶ、洪範是れ也。

という。『尚書』の偽孔傳ではさらに龜龍負衡傳説としての形を整えている。

河圖は八卦なり。伏羲 天下に王たりて、龍馬 河より出づ。遂

九宮八風圖の成立と河圖・洛書傳承

に其の文に則りて、以て八卦を畫く、之を河圖と謂ふ。

〔尚書〕顧命傳

天 禹に與ふるに、洛 書を出す。神龜文を負ひて出で、背に列す。數有り九に至る。禹遂に因りて之を第し、以て九類と成す。常道の次敘する所以なり。

〔尚書〕洪範傳

この龜龍負衡傳説は緯書の中でもしばしば語られる。

河圖龍出、洛書龜予。

〔易緯乾鑿度〕卷下。卷一上、六〇頁

河龍洛圖龜書(疑當作河龍圖・洛龜書)、聖人受道眞圖者也。

〔易緯是類謀〕卷一下、九九頁

乃受舜禪、即天子之位、天乃悉禹洪範九疇、洛出龜書五十六字、

〔尚書中候考河命〕卷二、九九頁

此謂洛出書者也。

〔春秋說題辭〕卷四下、一〇五頁

河龍圖發、洛龜書感。

〔孝經援神契〕卷五、二七頁

洛龜隴書丹青、垂萌畫字。

伏犧氏王天下、有神龍、負圖出於黃河、法而效之、始畫八卦、推

陰陽之道、知吉凶所在、謂之河圖。〔龍魚河圖〕卷六、八九頁

以上の例から知られることは、前漢末の劉歆及び緯書の河圖・洛書傳承においては、伏羲氏が天から與えられた河圖に基づいて畫いたものが八卦であり、禹が洛書によって陳べたものが洪範九疇であった、という觀念が通行していたことである。

では、鄭玄においては、どうであったか。『易緯乾鑿度』卷下「初與者戲也、姬通紀、河圖龍出、洛書龜予、演亦八者、七九也」の鄭玄注に、

伏羲初造十言之教、而畫八卦、至文王乃通其教。(卷一上、六〇頁)と、また、『尚書中候考河命』の「乃受舜禪、即天子之位、天乃悉禹洪範九疇、洛出龜書五十六字、此謂洛書者也」の注に、

天與禹洪範洛書、神龜負文而出、列於背、而數至九、(卷一、九九頁) という。これらより窺うに、鄭玄においても、八卦と九疇は河圖・洛書より直接に流出したものであり、天神の言語に屬するもの、と認識されていたとしてよからう。

異なる學術領域に屬する知識が統合され體系化される現象は、前漢末から後漢の時代の學術世界の大きな流れであり、白虎觀會議や鄭玄の學問に限らず、多數の例をあげることが出来るだろう。また、統合・體系化の理念も一に止まらないであろう。その理念の一つとして、全ての學問が天神の言語である河圖・洛書から流出したと認識する緯書の學術世界像(鄭玄を典型とする)があったと考える。その中では、諸種の思想の集成・統合は自然なことであり、とりわけ八卦や九數に關わるものであれば、統合は必然であつただらう。

『太素』の圖の中に八卦が書き込まれたことの意味は、もはや明らかである。

九宮八風篇の本文は、太一九宮占と八風占及び醫學的記載の集成からなり、それらが太一九宮の體系によって統合されたものであつた。一方、『太素』の圖の作者は、緯書の學術世界に照して最も相應しい統合原理を以て太一九宮の體系の上に置いたのである。九疇と九宮方陣を同一視すれば、八卦が圖に書き込まれることを礙げる理由はない。八卦は九疇(九宮)と相須つて、圖を統合する原理とされ、同時に、圖が河圖・洛書に連なる由緒正しきものであることの證とされたのである。それは、醫家を取り巻く支配的な學術世界、すなわち緯書の學術世界の中に、醫學を位置づけようとする營みであつたと

解釋できるだろう。

六 『靈樞』の圖

最後に、『太素』の圖と『靈樞』の圖との關係について、若干の推測を述べておく。

『靈樞』の圖は、八卦・八節・九宮の三項目だけを記載するが、『太素』の圖とも共通するこの三項目には、八卦と九宮が含まれている。それらは、緯書の學術世界の中では、河圖・洛書から直接に流出したものである。したがって、簡略ではあるけれども、『靈樞』の圖のほうが、當時の學術世界をより簡明直截に反映していると言える。

一方、既にみてきたように、『太素』の圖を構成する要素のうち、醫學の生理學に關わる「内・外・氣」以外の要素は前漢初期以前に成立していたものであり、かつ、圖と本文の内容とがよく對應していることからみて、『太素』の圖の成立を後漢期より後にまで引き下げる理由は今のところ存在しない。「刑德九宮圖」の存在は、むしろ『太素』の圖の成立が先行したことを強く暗示している。

兩圖は基本的には、前漢末から後漢末の間に、同一の時代思想の影響下に成立したが、『太素』の圖の方が古い知識の體系を保存している点とみるのが、現時點では妥當であらう。

七 おわりに

『太素』の圖の中には、遅くとも秦漢の際から前漢初期には成立していた太一九宮占・八風占・「日書」等の古い占卜の體系が混在して

おり、それらの集成の上に圖は作成されていた。圖は異なる諸種の體系を八卦と九宮によって統合したものであった。

この結論は、新たな問題を提起する。『七略』においては、方技略と術數略・兵書略とは異なる學術領域として設定されていた。しかし、劉歆の思惑とは別に、そして、「呪術から醫學へ」というドグマに對して、各種の占卜體系と醫學理論との關係は、再考を迫られることになる。それは、占卜を含む術數學に對する新たな評價につながるものとなるであらう。

つぎに、『易緯通卦驗』（卷二下、四九七〇頁）を始として緯書には醫學に關係する記述が散見している。しかし、緯書の側ではこれまで緯書との關わりを示す資料の存在は明らかにされていなかった。九宮八風圖は、緯書の知識が醫學の領域にも及んでいたことを傍證する最も早い資料の一つと考えられる。

このこともまた一つの展望を導く。それは、『通卦驗』の醫學關係記事の内容と考え并わせるとき、易が醫學を基礎づける自然哲學として浸透してゆくのは、緯書の學術世界の中で若しくはそこを經過してからのことであつたという豫測である。

注

- (1) 川原秀城「術數學—中國の計量的科學」五六・五八・六〇頁參照。
- (2) 『中國—社會と文化』第八號、中國社會文化學會、一九九三。
- (3) 本田濟『易學』一七七〜八頁參照。平樂寺書店、一九六〇。
- (4) 拙稿「一陰一陽と三陰三陽—象數易と『黃帝內經』の陰陽說—」參照。『中國思想史研究』第十五號、一九九二。
- (5) 九宮八風圖については、つぎの論文が參考になる。山田慶兒「九宮

九宮八風圖の成立と河圖・洛書傳承

八風說と少師派の立場」『東方學報』京都、第五十二冊、一九八〇。石田秀實「風の病因論と中國傳統醫學思想の形成」『思想』七九六號、岩波書店、一九九一。

(5) 以下のテキストを使用した。日本經絡學會編『素問・靈樞』、一九九二。仁和寺藏鈔本『黃帝內經太素』、東洋醫學善本叢書所收影印、オリエント出版社、一九八一。『黃帝內經太素』、人民衛生出版社、北京、一九六五。

(6) 「太一移」〔太素〕作徙。日、天必應之以風雨。以其日風雨則吉、歲美〔太素〕作矣、民安少病矣。先之則多雨、後之則多汗〔太素〕作旱。

(7) 緯書のテキストは、安居香山・中村璋八編『重修緯書集成』（明德出版社）を用い、引用のさいには、その卷・頁數のみを附記した。『易緯乾鑿度』卷下、「故太一取其數、以行九宮。四正四維、皆合於十五。鄭玄注、「太一者北辰之神名也。居其所曰太一。常行於八卦日辰之間曰天一。；四正四維、以八卦神所居、故亦名之曰宮。；太一下行八卦之宮、每四乃還於中央。中央者北神之所居、故因謂之九宮」（卷一上、四一頁）。

(8) 楊上善引く『九宮經』については、『隋書』經籍志・子部・五行類に著録されている『黃帝九宮經』一卷及び鄭玄注『九宮經』三卷などが考えられる。山田前掲「九宮八風說と少師派の立場」二〇八頁參照。

(9) 「九宮經曰、太一者、玄皇之使、常居北極之傍汁蟻、上下政天地之常口起也。汁蟻、坎宮名也；」。

(10) 「風從其所居之鄉來爲實風、主生長養萬物。從其衝後來爲虛風、傷人者也、主殺主害者也。」。

(11) 山田氏は、「個々の獨立した文章のほとんどは前漢代、それも多くは中期から後期にかけて書かれた」とする。山田慶兒「針灸と湯液の起源」二〇頁。『新發現中國科學史資料の研究 論考篇』所收。京都大

學人文科學研究所、一九八五。

(12) 『文物』一九七八年第八期、一二一―三二頁。『考古』一九七八年第五期、三三四―三三七頁。三三八―三四三頁。

(13) 山田前掲「九宮八風説と少師派の立場」二〇二頁以下参照。

(14) 「其大禁、大禁太一所在之日及諸戊己。凡此九者、善候八正所在之處、所主左右上下。身體有癩腫者、欲治之、無以其所直之日潰治之。是謂天忌日也。」

(15) 馬王堆漢墓帛書整理小組編『馬王堆漢墓帛書』肆、一三三―一三五頁。文物出版社、一九八五。馬王堆三號墓の墓葬年代は、「長沙馬王堆二・三號漢墓發掘簡報」参照。『文物』一九七四、七。

(16) 雲夢睡虎地秦墓編寫組編『雲夢睡虎地秦墓』、文物出版社、一九八一。睡虎地秦墓竹簡整理小組編『睡虎地秦墓竹簡』、文物出版社、一九九〇。

(17) 「禹臧(臧)狸(埋)包(胞)圖法。狸(埋)包(胞)、避小時・大時所在、以產月、視數多者、狸(埋)包(胞)。字者已、即以流水及井水清者、孰(熟)酒滌其包(胞)、孰(熟)捉、令毋汗、以故瓦甌毋無(蕪)者盛、善密蓋以瓦甌、令蟲勿能入、狸(埋)清(靜)地陽處久見日所、使嬰兒良心智・好色・少病。」(『馬王堆漢墓帛書』肆、一二六頁)。

(18) 山田前掲「九宮八風説と少師派の立場」二一七頁参照。

(19) 坂出祥伸「風の觀念と風占い」『中國古代の占法』所收、研文出版、一九九一。

(20) 『馬王堆漢墓文物』二二一―二四三頁。湖南出版社、一九九二。『刑德』乙篇についての基礎的研究には、饒宗頤「馬王堆『刑德』乙本九宮圖諸神釋」・陳松長「帛書『刑德』略説」がある。いずれも李學勤主編『簡帛研究』所收、北京、法律出版社、一九九三、十。これらの資料は、坂出祥伸教授に敬示されたものである。

(21) 前掲饒宗頤論文八九頁・陳松長論文九七頁参照。

(22) 山田前掲「九宮八風説と少師派の立場」二一六頁参照。

(23) 「陽動而進、變七之九、象其氣之息也。陰動而退、變八之六、象其氣之消也。故太一取其數、以行九宮、四正四維、皆合十五」(卷一上、四一頁)。

(24) 前注(7)参照。

(25) 顧頡剛「秦漢的方士與儒生」二二九頁、「談繪的內容、非常複雜。有釋經的、有講天文的、有講歷史的、有講神靈的、有講地理的、有講史事的、有講文字的、有講典章制度的。」

(26) 顧頡剛「秦漢的方士與儒生」二二九頁、「談繪書的出現、大約負有三種使命。其一、是把西漢二百年中的術數思想作一次總整理、使得它系統化。……其三、是把所有的學問・所有的神話都歸納到六經的旗幟之下、使得孔子真成個教主、六經真成個天書。」

(27) 池田秀三「緯書鄭氏學研究序説」七九―八四頁参照。『哲學研究』第五四八號、昭和五十八年。

(28) 間嶋潤一「尙書中候」における太平神話と太平國家」参照。日本中國學會報、第四十五集、一九九三。

(29) 『重修緯書集成』卷六解題参照。後に『緯書の成立とその展開』第二章收録。

(30) 「劉歆以爲、虞羲氏繼天而王、受河圖、則而畫之、八卦是也。禹治洪水、賜洛書、法而陳之、洪範是也。」

(31) 「河圖、八卦、伏羲王天下、龍馬出河、遂則其文、以畫八卦、謂之河圖」(『尙書』顧命傳)。「天與禹、洛出書、神龜負文而出、列於背、有數至于九、禹遂因而第之、以成九類、常道所以次敘」(『尙書』洪範傳)。

(32) 「禮記」大題正義引く『六藝論』にも、「遂皇之後、歷六紀九十一代、至伏羲始作十二言之教」とみえる。

(33) 『尙書中候』に附されている注については、間嶋氏の見解に従い、本稿でも鄭玄の注と認めることにする。間嶋前掲「尙書中候」における太平神話と太平國家」注4参照。

(34) 前掲拙稿「一陰一陽と三陰三陽」四三―四六頁。